

ジェノサイドの起源：スコラスティック・ムカソングの『ナイルの聖母マリア』を読む

元木，淳子

(出版者 / Publisher)

法政大学小金井論集編集委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学小金井論集 / 法政大学小金井論集

(巻 / Volume)

10

(開始ページ / Start Page)

33

(終了ページ / End Page)

58

(発行年 / Year)

2013-12

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00009915>

ジェノサイドの起源

— スコラスティック・ムカソングの『ナイルの聖母マリア』を読む —

元 木 淳 子

はじめに

スコラスティック・ムカソング Scholastique Mukasonga (1956—) は、ルワンダ出身のフランス語で書く女性作家である。1994年、世界を震撼させた「ルワンダの虐殺」で、両親、兄弟姉妹とその家族27人を失った。ムカソング自身は当時フランスに在って難を逃れた。

2004年に一時帰郷し、2006年、『イニエンジあるいはゴキブリ』⁽¹⁾を発表する。イニエンジ（ゴキブリ）とよばれて迫害され続けた家族の歴史をつづった自伝的作品である。

2008年、『裸足の女』⁽²⁾を発表。母の思い出をつづった回想録である。2008年〈人種差別、不正義、不寛容に抗する〉セリーニュマン賞を受賞した。

2010年、ルワンダ短編集『リギフ（飢え）』⁽³⁾を出版。植民地期以来ツチとして生きた人々の物語を紡いだ。

そして2012年、『ナイルの聖母マリア』⁽⁴⁾が発表される。作家の学校時代をもとにした小説で、2012年ルノー賞、アマドゥ・クルマ賞を受賞した。

伝記的作品からフィクションまで、何がどのように語られてきたのか。ムカソング作品の軌跡を追い、書くことが作家にとっていかなる作業であったのかを考えることが本稿の目的である。

1 『イニエンジあるいはゴキブリ』

1994年のジェノサイドが、内戦の中で政治的に組織された事件であったことは今日よく知られている。また、この惨劇の起源が、ヨーロッパの植民

地支配に根差していることも明らかにされてきている⁵⁾。

モンゴ＝ムブッサは、『イニエンジあるいはゴキブリ』（以下『イニエンジ』と略記する）の後書きにおいて、1960年のツチの僻地への強制移住が、ルワンダ史の知られざるエピソードであることを指摘している。まさしく、『イニエンジ』の独自性は、1994年の虐殺の前触れが、1950年代に遡っていることを内側から証言した点にある。以下では、植民地期から1994年にいたるルワンダの歴史を概観し、ムカソンガがこの時代をどのように生きたかを、『イニエンジ』でたどってみよう。

ルワンダの歴史

19世紀後半、ルワンダは中部アフリカの王国だった。牧畜民で少数派のエスニック集団であるツチが支配階層をなし、多数派で農耕民のフツ、少数派で狩猟民のトゥワと併存していた。1899年、ルワンダはドイツの保護領となり、第一次大戦後は、国際連盟委任統治領となってベルギーに実質支配された。

植民地期当時、ヨーロッパでは「ハム仮説」が流布していた。白人種のハム系諸族が、アフリカに文明を伝えたとする人種思想である。ツチは長身瘦躯であったことから、エチオピアを起源とする「半ハム」とみなされ、南下してルワンダに征服国家を築いたとされた。ツチは「支配する人種」として優遇され、植民地当局から、行政単位であるチーフダムの中のチーフ・サブチーフのポストをほぼ独占的に与えられた。1930年代以降は、身分証明書に「人種」の記載がなされ、フツに分類された人々には、賦役労働など負担が増す結果となった。また一般に、ベルギーの植民地では、カトリック教会勢力が統治に深く関与したが、教会も「ハム仮説」と人種主義を支持した。

第二次大戦後、ルワンダはベルギーの信託統治領となる。1957年、フツのエリートが、「バフツ宣言」を発表してフツの地位向上を訴え、1959年10月には、PARMEHUTU（フツ解放運動党）を結成。親ベルギー路線を鮮明にし、多数派フツによる自治を掲げた。

一方、1959年7月にルワンダの王が急死する。ツチ主体の王党派はこれをベルギーの謀略だと考え、以来、両者の対立は決定的となる。同年9月に、王党派はUNAR（ルワンダ国民連合）を結成。反ベルギー、完全独立を掲げ、

国際社会では東側陣営の支持を得た。

1959年11月、「万聖節の騒乱」が起こる。フツのサブチーフをUNAR支持者が襲撃したことに端を発して騒乱が全国に広がった。これが、最終的には多数派のフツ・エリートが権力を握るにいたる「社会革命」の幕開けとなる。この時、ベルギー当局が180度の方向転換をしてフツの後押しに回った。チーフ・サブチーフの大半を占めていたツチが多く難民化し、その空席をフツが埋めて、政治勢力地図は激変した。

1959年12月、ベルギー当局はチーフダムを廃止して、行政単位をコミューンとし、1960年6月にその長ブルグメストルの選挙を実施。MDR-PARMEFUTU（共和民主運動・フツ解放運動党）が勝利した。

1961年1月、共和制の施行が宣言され、同年9月、キゲリ王が退位した。

1962年7月、ルワンダが独立。MDR-PARMEHUTU党首のカイバンダが大統領となった。独立後は、民族毎に雇用や教育の機会が割り当てられるクォータ制がしかれ、ツチの社会進出は厳しく制限された。一方で、カイバンダ個人への権力集中と一党制化が進み、1960年代後半には、大統領と同郷の少数の取り巻きからなる権力中枢が形成された。ツチは言うに及ばず、南部や北部出身のフツも権力機構から排除され、その不満が1973年のクーデタにつながっていく。

1959年以来、周辺諸国に逃れていたUNAR支持派のツチ難民は、1961年から1966年頃にかけて、たびたびルワンダへの武力侵攻を試みた。カイバンダ政権は、難民武装勢力を「イニェンジ（ゴキブリ）」と呼んでその侵攻を撃退し、そのたびに、国内のツチに対して組織的な迫害を加えた。1963年末に、難民武装勢力が南東部のブゲセラ地方から首都キガリに迫った時には、報復として、多くのツチが殺害され、南西部のギコンゴロ州では、地方政治の指導者が扇動して、五千人余のツチが虐殺された。

ところで、隣国ブルンジは、ルワンダとは双子のように民族構成が同じで、少数派のツチが多数派のフツに対して優位に立ってきた。ルワンダとは異なり、ブルンジでは独立後も形勢の逆転は起こらなかったため、両国はつねに緊張関係にあった。1965年、ブルンジでは、クーデタ未遂事件を機に多くのフツ政治家が殺害される事件が起きている。さらに1972年5月には、数万人のフツが虐殺されたが、この時、ルワンダのカイバンダ政権は、ツチへ

の憎悪をあおって政治的求心力を回復しようとした。

1973年2月ルワンダで、ツチを高等教育機関や官庁から追放する事態が発生する。この混乱の中で、1973年7月、国軍司令官ハビャリマナらによるクーデタが起こった。北部出身のフツ軍人が中心だった。クーデタが民族融和を掲げていたことから、当時ツチのなかには事態を歓迎する向きもあった。

1975年、ハビャリマナは軍政下に政党MRND（開発国民革命運動）を結成する。その後、MRND一党支配のもとでハビャリマナ個人に権力を集中し、1978年、文民化した。ハビャリマナ政権も、親西欧、親カトリックの路線を取って、外国からの援助を取り付けた。だが、80年代半ば以降の経済危機のなか、大統領と同郷の少数の取り巻きが政権の中枢を占めるにいたる。クォータ制などツチへの差別も存続した。だが、1990年の内戦勃発までは、カイバンダ政権下のツチ虐殺のような事態は起こらなかった。

世界的な政治自由化の波の中で、ルワンダは1991年多党制に移行する。政党活動が活発化し、各党青年部が民兵組織として機能して社会的暴力が増幅された。

他方、ウガンダへ逃れたルワンダ難民第2世代のカガメ（現ルワンダ大統領）らが、1987年、RPF（ルワンダ愛国戦線）を結成した。1990年10月、RPF武装勢力が侵攻して、ルワンダは内戦状態に入る。

その後、地方の政治指導者に扇動されたツチ虐殺が発生する。1991年1月には、RPFが北部を攻撃した報復として、ツチの組織的な虐殺が起こった。ブゲセラでは、1992年3月、ラジオでRPFがフツ要人の暗殺を企てているとの放送がなされた直後に、副知事らが民間人を動員してツチを虐殺した。

1993年8月、タンザニアのアルーシャで包括的和平協定が結ばれた。実質的なRPFの勝利といえる内容で、フツ至上主義を唱える急進派は、「協定が履行されれば、RPFのツチがフツを再び支配する」というプロパガンダを強めた。1993年10月、ブルンジのフツの大統領が、ツチ主体の軍に暗殺される。これが、ルワンダ政界に大きな衝撃を与え、以来、急進派が「フツ・パワー」のスローガンを唱えはじめた。

このような状況下で、ハビャリマナは協定の実施を引き延ばしていたが、1994年4月6日、大統領専用機が撃墜されて死亡。翌朝から、ルワンダ国内でツチおよびフツ穏健派政治家たちが虐殺され始めた。急進派の政治家、高

級官僚、ジャーナリスト、教会関係者、教育関係者らが指令を発し、組織末端のフツ民間人が数多く動員された。これに対して、RPFは戦闘再開を宣言。7月に内戦終結が宣言されたが、この間に、ツチおよび反政府勢力のフツを中心として、少なくとも50万人の犠牲者を出した。

その後、アルーシャにルワンダ国際戦犯法廷が設置された。ルワンダ国内では、ガチャチャとよばれる民間法廷が開かれて、ジェノサイドの真相究明が行われている。虐殺が行われた教会などがジェノサイド記念館に指定されている。

『イニエンジあるいはゴキブリ』

語り手は一人称の〈私〉である。スコラスティカ・ムカソング Skolastika Mukasonga と名乗っていて、ペンネームの Scholastique と同一ではない⁶⁾。作家と語り手が同一人物で、完全なドキュメンタリーであると打ち出すことで、自身と親族が不利益を被ることを気遣っての措置だったのであろうか。

作品は14章に分かれ、それぞれに表題が付されている。以下では、先に述べたルワンダ史がムカソングとその家族によってどのように生きられたのかを追ってみよう。

(序章) 毎夜、私の眠りに現れるものは・・・

〈私〉は、フランスで暮らしながら、1994年にルワンダで亡くなった肉親の名をノートに書きつけては涙している。眠れば、追われる悪夢を見る毎日だ。

1章 1950年代末：早くも波乱のこども時代

〈私〉はギコンゴロ州に生まれた。父のコスマはルベバナというサブチーフの秘書だった。1958年、ボスの転任に伴って家族はブタレ州に引っ越した。1959年の万聖節の虐殺時、〈私〉は母ステファニアに負ぶわれて逃げのびた。

2章 1960年：国内追放

母子はトラックでブゲセラ地方の中心地ニヤマタの避難キャンプに移送された。そこからさらに僻地のギトゥエ村に強制移住させられる。

3章 ブゲセラ：僻地で生きのびる

ギトゥエは眠り病におかされた貧しい村で、ライオン、象、ヒョウが跋扈した。父は働きつめて結核にかかり、母はソルゴやコーヒー作りを強いられた。

4章 「民主的」追放

1961年の国民議会選挙で、ニヤマタのツチはカイバンダへの投票を強要された。1962年、ルワンダが独立。「数千のツチが殺され、15万人が周辺諸国に逃れ、ルワンダに残った者は、賤民の境遇に貶められた」⁽⁷⁾

1963年の暮、「キゲリ王が首都を解放する」との噂が流れたが、軍がヘリコプターでツチの村を掃射し、＜私＞と妹は森に逃げた。1964年、報復としてカイバンダは国内のツチを迫害し、多くがブルンジに逃れた。

5章 ギタガタ：畑、学校、教会

数年後、一家でギタガタに移住する。学校では数人に1冊の教科書で学んだ。

6章 1960年代：フツの暴力、民兵と兵士の間で。

ギタガタからニヤマタの学校への道は遠く、放課後は水くみ、畑仕事、掃除に忙しかった。

父は信心深いカトリックで、日曜日には家族でニヤマタのミサに参加した。

地方の権力者はたえずツチへの敵対心をあおり、昼夜を問わず家族は兵士の搜索に遭った。ニヤマタの教会が唯一の避難所と思っていたが、1994年、ここで五千人のツチが犠牲になった。その後、教会が再び祈りの場として使用されようとしたので、ツチの被害者が抗議し、今はニヤマタ虐殺記念館になっている。

1967年は年初より、フツの地方議員が会合で刀を配給しているとの噂が流れていた。復活祭の頃、ツチの若者たちがMDR-PARMEHUTU党青年部に襲われ、死体が湖に捨てられた。ツチの娘はレイプをおそれて、兵士が昼寝をしている隙に湖で水を汲んだ。

7章 1968年：国家試験、思いもよらぬ合格

1968年、＜私＞は中学への進学試験に合格した。当時のツチのクォータは公称10%だった。隣人たちが授業料を工面してくれて、ルワンダーの名門校、ノートル＝ダム・デ・シトーに入学した。

8章 1968-1971年：辱められる生徒

学校ではツチ差別に苦しみ、「辱められ排斥される孤独」⁽⁸⁾を味わった。掃

除当番を押しつけられ、食事もままならなかった。成績優秀だけが生き残る道だったので、3年間、ツチの仲間と夜間トイレで勉強し通した。

上級生のイマキュレ・ニラビャゴは、父がツチ、母がフツの都会の娘だった。のちにハビヤリマナ政権の閣僚の妻となる。＜私＞はイマキュレの庇護を受け、使い走りなどをしていた。イマキュレは、有力者の娘たちに取り巻かれていて、中にはカイバンダの娘もいた。取り巻きの多くは、父がフツ、母がツチで、カイバンダの娘も同じだった。取り巻きに交じって大統領の家に行ったこともある。

教師はベルギー人が大半で、フランス人、イギリス人、ツチのキニアルワ語の教師が各1人いた。作文ではなにごとにつけ、カイバンダ万歳と書かねばならなかった。

3年の時、儉約の末はじめてトングを買った。それまでは裸足で通していたのだ。

9章 1971-1973年：ブタレの社会福祉士養成学校、普通の暮らしという幻想

1971年、ブタレのソーシャルワーカー専門学校の4年コースに進学した。1学年30人中、ツチが6人いた。卒業生には女性議員もいるエリート校で、教師も民族差別をせず、自由な校風ですばらしい教育が受けられた。

この頃、1959年に謎の死を遂げた王の未亡人ギカンダを、何度か表敬訪問した。麗人だったが1994年に虐殺された。

10章 1973年：学校から追われ、ルワンダから追われ

1972年秋の新学期に校長が交代して校内の雰囲気が一変する。新任教員の中には、1972年5月の「血塗られた事件」でブルンジからきた難民もいた。フツ至上主義の学生リーダーが授業をボイコットして、仲間と公然と謀議を重ねるようになった。

ついに異変が起これ、騒擾の中で＜私＞は森に隠れ、ブタレの代母の弟に匿われた後、知人の夫でフツの議員に車でキガリまで送られ、そこでニヤマタの神父に保護された。

一家は無事だったが、学校に行っている子が狙われるとして、兄アンドレとともに＜私＞はブルンジに避難した。

11章 1973年：ブルンジで難民となる

首都ブジュンブラの難民キャンプから、ギデガ市のソーシャルワーカー

専門学校三年に編入された。兄が働いて学費を工面してくれた。75年に<私>が資格を取ると、兄はセネガルに留学して医師となった。

<私>はブルンジでユニセフに雇われ、農村でこどもの栄養指導などをした。

12章 ルワンダ：禁じられた国

ブルンジからの連絡は危険だったので、両親には兄がセネガルから便りをした。やがて妹ジュリエヌが勉強のためブルンジに合流。一度は両親会いたさに二人で里帰りを決行したが、娘たちの身を案じた母は、一晩だけ過ごさせてブルンジに戻らせた。

ブルンジで、<私>は、口承文学の研究者でフランス人のクロードと出逢い、結婚。男の子二人を得た。1986年、夫の仕事の都合で、ジブチで暮らすことになる。フランス国籍を取得した<私>は、家族とともに「正規のルートで」ルワンダに立ち寄り、両親に結婚の報告をした。

この時、ニヤマタにはハビヤリマナ支持者が移住してきていて、ツチを取り囲んでいた。両親は娘夫婦のために祝宴を開き、フツの隣人たちも招待したが、これが両親との最後の出会いとなった。

13章 1994年：ジェノサイド、予期された惨劇

1992年から惨劇の予兆があった。1994年の春をどんな風にフランスで過ごしたのか、<私>にはまったく記憶がない。父は「いつになく雨が降る」と手紙に書いてきた。

ジェノサイドを生き延びた身内のこどもたちを、兄がセネガルで面倒を見てくれたので、1995年2月<私>はセネガルを訪れた。助かったのは、姉アレクシアの娘たちで14歳のジャンヌ＝フランソワーズと6歳のリタ、妹ジャンヌの末娘で3歳のナナ、妹ジュディスの娘ジョスリーヌたちだった。ただ、ジョスリーヌは夫とこどもを殺され、自身はレイプされてエイズに感染し、長くは生きられなかった。ジョスリーヌは一度、判読できぬような筆跡で、<私>に奇怪な手紙をよこして事の次第を報告してきた。

姉アレクシアの夫ピエール・ンテレエは大学人で、フツ政府の閣僚経験者でもあった。1994年の事件の際、フツの友人で、タバのブルグメストルだったジャン＝ポール・アカイエズ（アルーシャ国際法廷で無期懲役：筆者注）に助けを求めたが、捕らえられ、食事を届ける娘ジャンヌ＝フランソワーズの眼前で、連日、四肢を切断された。娘はそのことを<私>に語ろうとする

たびに、頭痛やめまいに襲われた。「生き延びた者も魂の抜け殻だった」⁽⁹⁾。

ジャンヌは、小さい頃から<私>が母親代わりに面倒を見てきた、一番近い妹だった。夫のエマニュエルは、騒擾の中で妻子と生き別れ、泥の中に潜伏していたところをRPFに救われた。ジャンヌは8ヶ月の身重で、末娘のナナといたところをとらえられ、腹を割かれて虐殺された。エマニュエルは、のちに孤児収容所でナナを見つけ出した。ジェノサイドで、ニャマタの6万人のツチのうち、生存者は5348人となった。

14章 2004年：死者たちの国への道

2004年、<私>は「涙の国」⁽¹⁰⁾ルワンダに戻った。ギタガタには、かつて肩を寄せ合って暮らした家族も、近隣住民も、だれひとりいない。ルワンダに踏みとどまった両親は、30年の迫害の果てに殺された。長兄アントワーヌの一家、姉ジュディス一家ともに全滅。長兄アントワーヌは、若い頃から父親代わりに家族を支え、家族のために人生を捧げたあげくに殺された。<私>は怒りを抑えきれない。かつて教師だった男は教え子に殺され、かつて<私>をブルンジ国境まで逃がしてくれた兄の親友も殺された。

1986年に、結婚報告の宴に招いた隣人のフツは、<私>を見るなり、「自分は何も知らない！」と叫んだ。<私>がコスマの娘だと知ると、誰もが自分はコスマなど知らぬと主張する。ガチャチャ裁判からは何も期待できない。裁く者も血にまみれているからだ。結局<私>は、両親を殺した犯人が突き止められぬことを知る。

茫然とたたずむ<私>の前に、草むらから一匹の黒蛇が現れる。「白人が来る前は、一家に一匹蛇がいて、死者たちの霊の国への道を示してくれたものだ」⁽¹¹⁾と言った母のことが思い出され、その蛇が、死者たちからの使いのように感じられるのだった。

証言するということ

<私>にとってルワンダへの道は遠く、戻るには十年の歳月が必要だった。そして、帰国した<私>は、証言することが生き残った者の義務だと考えるにいたる。

「かつて暮らした家は跡形もなく、まるで、自分たちが存在すらしなかったかのような。だが、私の家族は、屈辱と日々の恐怖の中で、たしかにそこ

で暮らしていたのだ。そのことを記憶しているのはもう自分だけだ。私がこの文章を書いているのはそのためなのだ⁽¹²⁾と語り手は言う。だが、証言することも容易ではなかった。「(妹ジャンヌの最期を書く) この時が来ることを私は長い間おそれていた。(・・・) (妹の死について) 私はこの数行を涙でつづる」⁽¹³⁾と記している。

『イニエンジ』に記されているのは、圧倒的に苦しい体験である。だがここには、過酷な歴史を乗り越えるための歩み寄りの可能性も書き込まれている。1973年、ブルンジの専門学校で、ともにジェノサイドの被害者として、フツとツチの生徒が心を通わせたエピソードが描かれている。また、ルワンダの専門学校では、教育者の方針によって、民族対立から解放されたのびやかな暮らしがあったことが告げられている。

作品は、<私>が「死者たちの思い出をノートに記そう」と決意して終わる。そして読者は、この決意の結果が、ほかならぬこの自伝的作品であることを知る。さらにこの決意は、次なる回想録『裸足の女』の訪れを予告しているのだ。

2 『裸足の女』

語り手は一人称の<私>で、作家と同名のスコラスティック・ムカソングと名乗っている。作家の実の母親の回想録であることが明瞭に示されている。ちなみに、ルワンダには姓がない。クリスチャン・ネームと、父親がつける名前があって、個人一代限りのものである。作家は、後者の名こそ「本当の名前」だと考えている。

作家の母は生前、「自分の亡骸を他人の目に触れさせてはいけない。パーニュ(腰布)で包んで葬送するように」と命じていた。語り手は、「お母さん、あの時私はそばにいて、あなたの身体を包んであげることができませんでした。あなたの言いつけを果たすには、もう言葉しか—それもあなたには分からない言葉しか—ありません」⁽¹⁴⁾と呼びかけ、ことばで母のかたびらを織ろうと告げる。全体は10章に分かれ、それぞれに表題がつけられている。以下に順を追ってみてみよう。

1章 こどもたちを救うこと

母ステファニアは、人生のすべてをかけてこどもを守ろうとした人だった。常日頃から、騷擾に備えてこどもを茂みに隠す算段をし、隠れ場には食べ物を備蓄していた。こどもたちには避難の予行演習をさせ、ブルンジに通じる道を教えた。夕食時の襲撃に備えて、こどもが食べている間、外で見張っていた。

2章 月の涙

ステファニアは、自然界の予兆をめざとく察知した。ギタガタの家の庭にあったヒマの木が、満月の夜に涙を流すことがあったが、それは不幸のしるしだと言った。1994年の惨劇を思えば、月が涙するのも故なしとしないだろう。

3章 ステファニアの家

ブゲセラで、母はインズ（伝統的な家）を建てた。インズには中庭と裏庭がある。母は裏庭で料理をし、薬草やたばこも栽培していた。エリスリナの真っ赤な花が、精霊の長であるリャンゴンベのおとずれを告げる。カトリックの神父には悪魔と呼ばれたリャンゴンベだが、母は祈りを捧げていた。

4章 ソルゴ

母はソルゴを作った。ソルゴは特別な作物で、7月初めに初穂で緑白の餅をつき家族だけで祝う。それが一年の始まりだ。だが、そのことに白人伝道師は気づきさえせず、何事もキリスト教的に行おうとする、と母は言った。

5章 薬

ツチの母親にとって、追放された地で牛が飼えず、こどもたちに牛乳を与えられないのが何よりつらいことだった。ニャマタのツチの医者は薬を持っていなかったのので、母は薬草を栽培して民間療法を行った。孫の寄生虫を退治して命を救ったこともある。

6章 パン

白人のメイドをしていたツチの女が、ある時ニャマタにパンを伝え、以来、裕福な子が友達に見せびらかして食べるようになった。女はやがて酒場を開き、ニャマタに猜疑の種をまいた。

7章 美容と結婚

日曜の午後になると、女たちは集まって美容にいそしみ、ビールを飲んだ。既婚の女の楽しみはパイプで、順に回してくゆらせた。

母は婚礼前の娘の品定めに定評があり、縁談の相談にのることもあった。

8章 アントワヌの結婚

母は、長男アントワーヌの嫁にと働き者の娘を選び、結婚の段取りを整えていたが、土壇場で、隣家の金持ちが娘を略奪してしまった。その後ジャンヌが嫁いできて、アントワーヌは9人の子に恵まれた。そのうちの誰かは助かるだろうと母も安心していたが、それは誤りだった。

9章 お話の国

夜、インズの炉の前で、娘たちは母の話聞いた。まどろみながら聞いたがいくつも覚えている。

一方、白人はツチに悪夢を語った。私たちの身体を計測し、私たちがハムだと言い、ツチの起源がチベットやガンジスにあるといった。母は修道院で女中として働いていたが、そこで、ツチがエチオピアからアビシニアに移動してきたと教えられた。これこそ私たちの死を決定した話なのだ。

10章 女たちの話

母親たちは集会を開いて、協力して生活を切り拓いた。その母親たちも1994年に虐殺された。ツチの娘へのレイプはフツの既得権とみなされていた。その結果妊娠した娘は、犠牲者であるのに周囲から忌み嫌われた。だが、母の村で娘が被害にあった時には、連帯と哀れみの気持ちから母たちは娘を保護し、生まれたこどもをウムトニ（この子は我々とともに）と名付けた。

1994年、レイプは虐殺者たちの武器の一つだった。彼らの大半はエイズ感染者だったが、女たちは、自分とこどもたちのうちに生きる勇気を見出した。「今日ルワンダは、勇敢な母たちの国である」。⁽¹⁵⁾

(終章) 死者の霊は、夢を通じて生者に語りかけるのだろうか・・・

<私>は悪夢に悩まされている。神父が学童らに白い花を摘んでこいと命じる。向かったのはレベロの丘。祭壇の裾には骨が積まれている。幼友達の声がこだまし、この人たちすべてを包む大きなパーニュを持っているのかと<私>に問いかけた。

『裸足の女』というタイトル

裸足へのこだわりは、ムカソング作品に共通する特徴だ。『裸足の女』では、水汲みに行き、暗闇の中を足を傷だらけにして戻ってくる<私>に、母が、足にも目をつけて怪我をしないよう訓練しなさいと命じる。また、専門学校の女性教師の足が醜かったことを挙げて、それこそがアフリカを養う母たちの足なのだ

述べている。『裸足の女』というタイトルには、裸足から靴の生活に入った作家の、裸足で通した母に対する深い情愛がこめられている。

カマラ・ライの自伝的小説『アフリカの子』(1953)と『イニエンジ』との親近性については、先述のモンゴ＝ムブッサが指摘しているところだが、『裸足の女』も、伝統の守り手であり、不思議な力に満ちた母を描いた点が、『アフリカの子』と共通している。

前作同様、『裸足の女』でも長年にわたる母の恐怖の日々が描かれている。だが、『イニエンジ』に比べて事件や実名はおさえられ、そのかわりに、農作業の風景、伝統の行事などが細やかに描かれて、威厳と慈愛に満ちた母の姿が印象づけられる。

<私>がことばで織ろうとした母のかたびらは、その非業の死のみを語るものではない。逆境の中で戦い抜き、なお光り輝いていた女傑としての姿を描き出すことによって、娘である<私>はそのかたびらを完成させるのだ。

そして、回想録の最後の死者からの問いかけに、次なる『リギフ』が答えることになるだろう。

3 『リギフ (飢え)』

『リギフ』はルワンダ短編集と銘打たれ、5編の短編からなっている。以下に順を追ってみたい。

1 「リギフ」

リギフとは、キニアルワンダ語の「イギフ (飢え)」に、フランス語の定冠詞が加わったものである。語り手である<私>は、コロンバと呼ばれるツチの娘で、ニャマタに移住させられ、飢えに苦しんできた。祖父母は食いしん坊は最大の悪徳だと教え、母も人前で食べてはいけないと命じた。口に入れるものが何もなく、ゾウや殺されたツチを埋めるという「ルワバヤングの穴」が体内にできたようだった。

ある時ついに、飢えは<私>を死の門まで連れて行った。美しい光が見え、輝く分身が体から抜け出たとき、母の声が聞こえて<私>は息を吹き返した。その光を思い出すとき、1994年に虐殺された同胞も死ぬときは安らかであったかと思うのだ。

2 「雌牛の栄光」

ここでは、一人称の語り手である〈私〉が二人登場する。カリサとその息子のカレケジである。前者は、1960年代ニヤマタに移住させられたツチで、作家の両親の世代にあたる。

カリサは、立派な牛飼いだっただ父の栄光の日々を回想し、伝統的な暮らしぶりを美しく語るが、自分自身はニヤマタに来てから牛は飼えなくなっていた。1962年、虐殺を逃れたひとりのツチが、牛を連れてニヤマタに避難してきた。カリサたちの心に灯がともるが、まもなく男はブルンジに逃れていった。

カレケジはジブチに亡命して苦勞を重ねた。初めての給料を父に送り、父はそれで雌牛を一頭買ったが、1994年にみな殺されてしまった。カレケジは今もキガリに住み、ジェノサイドで未亡人となった女性と結婚して、私大で教鞭をとっている。隣人のフツとビールを酌み交わす日常だ。夢の中に、ルワンダに雌牛をもたらしたといわれるギハンガ王が現れて、「ツチよ、それでも雌牛を世話する民なのか」と責めるが、〈私〉は聞こえないふりをしている。

3 「恐怖」

ニヤマタのツチに影のようにつきまとうのは「恐怖」だ。語り手の〈私〉は、ルワンダから遠く離れたフランスにいるが、いまだに背後から足音がすると怯えてしまう。

ニヤマタにいるとき、母は、自分たちが「ゴキブリ」であることを忘れるな、おまえの守護天使は恐怖だ、とこどもたちに言い聞かせていた。

ある時、1959年、1963年の虐殺を思わせる騒擾の予兆があった。男たちが妻子を逃がす算段をしている間に、母子たちは一カ所に集合し、各自蓄えておいた食糧を放出してご馳走を作り、一張羅の着物を着て寝た。その時は無事で、翌朝から普段の恐怖の日々に戻ったが、いつか大きな恐怖の日が来ると〈私〉にはわかっていた。

4 「美しいことの不幸」

美しいツチの女であることは最大の不幸である。エレナは、あまりの美しさに、ノートル＝ダム・デ・シトーに在学中は、休暇で帰省すると人々が鳴り物入りで迎えたものだった。語り手の〈私〉は、下級生としてエレナにかわいがられていた。

卒業後、エレナはベルギー企業で秘書となり、後に、フツの焼き肉店主の愛

人となった。エレナは結婚できなかった。ツチの男は貧乏だし、フツの男は、裏切り者よばわりされることをおそれて、ツチを正妻に迎えないからだ。1973年のクーデタの際、カイバンダと同郷だと吹聴していた焼き肉店主は住民の略奪に遭う。エレナは白人外交官に守られてブルンジに逃げた。〈私〉も学校から追われた。

その後エレナはブルンジで高級娼婦として名をはせた。ザイールの独裁者モブツがブルンジへ来たとき、当局は外国人のエレナを捧げものとしたが、モブツはやせたエレナが気に入らなかった。以来、「モブツの女」と関わることを白人が恐れ、エレナは高級クラブから閉め出される。

ある時、〈私〉の前にやせ細ったエレナが現れ、かつて白人外交官との間にできたこどもを育ててほしいと願い出る。エイズが広がり、感染の元凶だとしてミニスカートの女たちが襲われる事態の中で、エレナはならず者に刺し殺された。

5 「服喪」

ムカソング作品としては、この短編ではじめて一人称の語り手が姿を消し、物語は俯瞰的視点から客観的に語られる。

ミエゴという名の〈彼女〉はフランスで暮らしているが、そこでは誰も1994年の虐殺のことを話さない。手元には「ツチ」と書かれた自分の身分証があるだけだ。

ある時、知人の親族の葬儀に参列した〈彼女〉は、その穏やかな死に顔に、自分の父親の面影を見出して、嗚咽をこらえきれずその場を去る。以来、近くの教会で、見知らぬ人の葬儀に参列しては嗚咽することがミエゴの習慣になった。そのことを司祭に見とがめられ、死者たちが待っているのは異国ではなく、ルワンダなのだと考えた彼女は帰国する。

五千人が殺害されたギハンガの教会はジェノサイド記念施設となって、死者の番人が管理している。番人はミエゴを覚えていた。死者たちに呼ばれてここへきたと彼女が告げると、番人は、「ここに死者たちはいない、死があるだけだ」と答えた。

フィクションとしての『リギフ』

『リギフ』の作品世界の内容は、前二作の伝記的作品とほとんど重なっている

る。各短編はきまって、1994年の死者を想起して締めくくられ、追悼の念が示される。

一方で、前二作では、作家の体験や他者の証言が積み重ねられていたのに対して、『リギフ』の世界は、実体験の範囲にとどまらない。

たとえば、作家は実生活で祖父母と暮らした経験を持たないが、「雌牛の栄光」では、ルワンダの牛文化について、作家の祖父母の時代にさかのぼって調べられている。また、「服喪」でとりあげられた「ギハンガ記念教会」だが、老番人とのやりとりなど『イニエンジ』におけるニャマタ記念館のエピソードと重なるものの、ギハンガという地名は作家の実人生とは直接関係をもたない。

『リギフ』で作家は、自身の体験にもとづきながらも、フィクションの世界に踏み出したといえる。『裸足の女』の最後に幼友達が投げかける問いに、『リギフ』はフィクションの力を借りて答えようとする。作家の親族にとどまらず、1994年の犠牲者すべてを追悼する大きなパーニユを作家は織ろうとするのだ。

「服喪」の最後で、記念教会の番人は「死者たちは墓でおまえを待っているわけではない。死者たちはおまえの中にいる。おまえのそばにいる。おまえに生きる勇気を与え、試練を乗り越えさせるために。ルワンダであろうと、外国であろうと、おまえのそばにいる。何もおそれることはない」と主人公を力づける⁽¹⁶⁾。そして読者は、次なる小説『ナイルの聖母マリア』において、死者たちに生きる力を与えられ、死者たちとともに、生者の世界に戻っていく作家の姿を見ることになるだろう。

4 『ナイルの聖母マリア』

ここでは、『リギフ』の「服喪」と同様、語り手は物語の背後に消える。小説は12章に分かれ、章ごとに表題が与えられている。以下に順を追って見てみよう。

1章 ノートル＝ダム・ドゥ・ニル

舞台は、イキビラ山上のノートル＝ダム・ドゥ・ニル校 Notre-Dame du Nil。ルワンダ独立時に創設された寄宿制のカトリック女子校である。生徒の多くは有力者の娘で、卒業後は政略結婚が待っている。登場人物は最高学年の生徒たち。1学年は20人で、うち2人がツチのヴェロニカとヴィルジニアである。

1924年にナイルの源流が発見され、1953年、その地に黒いマリア像が建立さ

れた。5月の聖母月には、このマリア像まで巡礼のピクニックに出かけるのが学校の恒例行事だ。学校には、大勢のチーフとその妻たちの集合写真があるが、大部分に赤線が引かれている。生徒のボスの存在であるグロリオサは、赤線の人たちは殺されたのだとくすくす笑う。ヴェロニカはいつか自分にも赤線が引かれるのだと思う。

2章 新学期

新学期になると、帰省していた娘たちを送り届ける高級車で、学校の周りは混雑する。グロリオサの父親は政界の有力者で、ゴキブリが戻ってくるとくりかえし世間を煽っている。娘は政治委員会を組織して学内の動静を監視している。

ルワンダ人の神父は、パフツ宣言を支持し、「フツが多数派の人種であること」を誇りにしている。

3章 勉学の日々

地理と歴史を教えるルワンダ人の女性教師は、「ルワンダの王の歴史は忘れるように。アフリカについては地理を学ぶだけでよい」と言う。

4章 雨

生徒のイマキュレが、「雨降らし」の老女を訪ねたことを級友にうちあける。雨降らしは伝統社会では尊敬されてきたが、白人が到来した後は身を潜めて暮らしている。呪薬もあつかう雨降らしに、イマキュレが「ほれ薬」を処方してもらったところ、効果はてきめんだったという。グロリオサは、イマキュレの父が実業家で、党の役に立つ人物だから、雨降らしの件は密告せずに見逃してやろうと言う。

5章 イシス

美貌のヴェロニカは、散歩に出ている白人男性に声をかけられる。男は売れない画家で、一旗揚げにアフリカに来て、ツチの起源に興味を抱き、エジプト起源説を奉じるに至った。「フツは王を追放し、ツチを虐殺した。ツチはというと、黒いファラオの帝国から来た記憶を失っている。ツチが減びても、その伝説は救いたい」と考えた男は、ルワンダ女王の墓のある地所を買い、その墓を暴き、その上にエジプト風の聖堂を建てた。屋敷の壁には、戦士と踊り子の絵が描かれている。男はヴェロニカをイシスと呼び、三千年前のエジプトの女王として崇めたいと言う。

この話を聞いたヴィルジニアは、「白人は好き勝手な名をルワンダ人に与える。

祖母の時代には、白人がツチの女に白い装束をまとわせ、エチオピアやエジプトの女王に見立てて、妄想をふくらませていた」と告げ、白人は自国で禁じられていることを平気で行うから注意せよ、と警告する。案の定、男はヴェロニカに薬を飲ませてイシスを演じさせ、それを映像におさめたあげく娘に金をにぎらせ、留学をちらつかせて口を封じた。以来、ヴェロニカは学業に身が入らず、ヨーロッパ行きを夢見て白人のもとに通う。

6章 恥の血

モデスタは、グロリオサの腰巾着だ。父はフツで、母はツチである。モデスタの父はツチの政治家の秘書だった。ボスが王党派政党の党首になったのでつき従おうとしたが果たせず、結局、PARMEHUTUが勝利したため、裏切り者の烙印を押されて出世の道を失った。モデスタは、グロリオサに忠誠を示して、自らのフツ性を示さねばならないと思っている。モデスタは、フツでもツチでもない子が欲しいと言う。父は、再フツ化した後、ツチの妻を恥じて彼女を家に閉じこめた。モデスタ以外のこどもたちも母親を忌み嫌っているのだという。

7章 ゴリラ

理科の白人教師がゴリラ研究家で、週末にはムハブラ山に行くのだが、これに生徒のゴレッティが反発する。「白人がゴリラを発見したのではない。自分は火山の麓の出身で、ゴリラはつねによき隣人だった。ゴリラを白人の手から取り戻すために、ゴリラを見に行く」と宣言する。

ゴレッティの父は軍人で、イマキュレの父とひそかに親交がある。ゴレッティは、軍人の護衛つきジープを父に仕立ててもらい、イマキュレとゴリラを見に行こうとするが、白人女性研究者が入山を許可せず、ガイドがつかなかった。

そこで、歩くこと数時間。トゥワの老人にガイドを頼み、ついにゴリラと遭遇した。思わずひれ伏したゴレッティは、ゴリラの方こそ、互いに殺し合う人間になることなど願ひ下げただだろろうと考える。

8章 処女マリアの衣の下で

生徒のフリーダは、ザイル人大使の何番目かの妻になる予定だ。フリーダの父は駐ザイル大使秘書である。娘は週末毎に外泊し、外交関係が学則に優先すると教師も黙認するなか、豪勢な暮らしを楽しんでいたが、やがて妊娠し、それがもとで死亡する。

9章 女王のウムジム

休暇で帰省したヴィルジニアは、一人のウムウィル（王の秘密を保持する人）に会いに行く。夢に、白人に墓所を掘り返された女王のウムジム（霊）が現れるので、正しい霊の慰め方を教えて欲しいと頼んだ。ウムウィルは、白人に眠りを覚まされた女王の霊が憤っているのだと告げる。ヴィルジニアは、単身白人画家の屋敷に赴き、許可を得て、墓所であった場所に捧げものをする。

一方、白人神父は、長年画家を改宗させようと働きかけている。神父によると、ツチはモーゼの子孫で、エジプトを出て南下し、クシュにいたった。シバの女王もツチだという。神父は自説でツチが慰められるだろうと考えている。

10章 ボードゥアン王の娘

ベルギーのボードゥアン国王夫妻がルワンダを訪問し、王妃ファビオラが学校を見学に来る予定だという。このことを生徒のゴデリブは事前に承知していた。ゴデリブの父は富裕な銀行家で、大統領とは旧知の仲である。ベルギー国王夫妻にこどもがないので、来訪を機に、大統領が自分の末娘を養女として贈る計画なのだという。わが子を差し出すのは最高の贈り物だから、そこから国への援助も引き出せようというのだ。ゴデリブは成績不良で器量の悪い娘だが、養女のおつきとしてベルギーに渡り、キニアルワンダ語で話し相手になるのだという。結局、養子縁組の話は断られたらしく、ゴデリブは学校から姿を消した。

11章 処女マリアの鼻

グロリオサは、ナイル源流に建立されたマリア像がツチの鼻をしていることが不満だ。ベルギーと教会がツチ寄りだった頃に作られたためで、グロリオサは「多数派の鼻」⁽¹⁷⁾にすぎ替えようと企て、雨の中をモDESTAと出かけて、像の鼻をへしおる。

泥だらけで帰ってきたところを校長にとがめられたグロリオサは、「イニエンジ（ゴキブリ）に襲われた、ツチ商人ガタラの息子だった」と嘘をつく。無実の青年は刑務所に送られ、グロリオサは英雄となる。

その後、山刀で武装した民兵や兵士が学校に現れるようになった。グロリオサは、再びマリア像への細工を試み、今度は誤ってその頭部を破壊してしまう。学校から巡礼に出かけた生徒たちは、頭のないマリア像を見てパニックを起こす。グロリオサは、自分の父が新しいマリア像を用意すると生徒たちに告げ、像を壊した犯人は、「ゴキブリ、コミュニスト、無神論者だ！」⁽¹⁸⁾などと扇動する。

12章 学校は終わった

グロリオサは、正統マリア像建立委員会会長を自ら宣言し、図書館を占拠する。授業には出ず、他の授業を襲っては、キニアルワンダ語で演説して回った。校長は執務室にこもりきりになる。

グロリオサはたちまち学内の支配権を確立した。ツチと話すことを禁じ、密告制度を敷いた。食堂には、修道女や監督官のテーブルに人影はなく、フツの生徒は先に食事をして、ツチに食べ残しを与えた。

グロリオサはゴレッティを傘下におさめようとするが、後者は慎重に距離を置く。ヴェロニカは「父が1963年、拷問を受けた。今はツチの公務員と大学生狩りが行われている。自分たちが襲われるのも時間の問題だから逃げよう」とヴィルジニアを誘うが、後者は免状取得目前だからと断る。

グロリオサとルワンダ人神父は、首都から指示を受け、新マリア像建立と同時に、JMR(ルワンダ闘争青年同盟)の集会が開催されると告げた。

ヴィルジニアは襲撃を恐れて夜も眠らずにいたが、ついに睡魔に襲われる。夢に女王の霊が現れ、ガタレという名の白い仔牛を与えようとする。その言葉にヴィルジニアはなぜか安堵を覚え、運命の時は近づいているが、自分は助かるだろうと確信した。

新しいマリア像が到着した日、ヴェロニカが消えた。イマキュレが、JMRが来たら、逃げずに自分の部屋に来いと手紙で告げた。イマキュレと親しくなかったヴィルジニアはいぶかしんだが、イマキュレの「本当の名」がムカガタレといい、夢で女王にもらった仔牛と同名だったので、信用すると決めた。イマキュレは、くだんの雨降しの老女にヴィルジニアをかくまわせた。

この間、二十余人のJMRの暴漢が白人画家の家を襲い、避難していたヴェロニカを虐殺し、白人は自殺する。ヴィルジニアを取り逃がしたグロリオサは逆上し、モDESTAをツチを逃がした裏切り者と決めつけて、JMRに乱暴させた。

この時、クーデタが発生。ゴレッティはただちに「本物のフツ」が起こしたクーデタの正統性を主張し、「火山の麓で培われた本物のキニアルワンダ語で話そう」⁽¹⁹⁾などと呼びかける。イマキュレの父はゴレッティの父に資金援助をしたらしい。グロリオサはいずれかへ連行される。グロリオサの父は、逃亡したか、捕らえられたか。大統領は官邸に監禁されている。生徒たちは一斉にグロリオサを批判しはじめた。

ヴィルジニアは「ルワンダは死の国だ。死神が支配しているこの国を離れる」

とイマキュレに告げた。

フィクションの世界へ

『ナイルの聖母マリア』も、先行作品と同様、作家の実体験に根差した作品である。一方、ここで作家ははじめて長編小説の世界に移行した。ジェノサイドの恐怖とクーデタ事件という作家の極限体験に根降ろししつつ、フィクションという手法を採用することで、この危機の根源に迫ろうとするのだ。

1) 実人生との関係

作家の中学と専門学校での体験が、小説の源泉になっていることは明らかである。両校での体験が、小説では一つにまとめられている。『イニエンジ』で描かれた寄宿舎生活、73年の学校からの逃走などが、『ナイルの聖母マリア』ではフィクションとして再構成される。終幕近くで、フツ至上主義者が独裁をしき、ツチの生徒が学校から逃走するくだりはテンポが速く、迫力がある。ツチの追放騒ぎがクーデタへと急転する場面展開も鮮やかだ。

2) 事件、人名、地名

『ナイルの聖母マリア』では、前三作で描かれてきた事件や実名の多くが消えている。

実在の人物が消えたかわりに、登場人物の「父が与えた本当の名」に象徴的な意味が付与されている。たとえば、イマキュレ・ムタガタレの名が夢の仔牛と同名であることが、ヴィルジニアの信頼のよりどころとなる。グロリオサ・ニラマスカ（鋤の女）は、「多数派のフツが、鋤の民として長年ツチの圧政に苦しんできた」というカイバンダ時代のプロパガンダにふさわしい名前である。ヴェロニカ・トゥムリンド（この子を守ってくれ）は、その名にもかかわらず、小説中ただひとり凄惨な死を遂げ、その過酷な運命が読者に印象づけられる。イマキュレは、ヴェロニカの死の顛末をヴィルジニア・ムタムリザ（この子を泣かすな）に語るに際して、その名前を持ちだして、どうか泣かずに聞いてくれと頼むのだ。

また、小説では1994年のジェノサイドについて全く触れられていない。小説の中心人物で、作家の実像に最も近いといえるヴィルジニアに出身地名は与えられていない。ニヤマタ、ギタガタ、ブゲセラなどの地名も消えた。政治に関しては、政党名のPARMEHUTUが出てくる程度で、大統領カイバンダ、ハビヤリマナの名前さえ現れない。時代も明確には特定されない。1963年の虐殺でヴェロ

ニカの父が被害を受けたと設定されているところから、登場人物は作家と同世代と推定され、小説で起こるクーデタは1973年のそれと判断される程度である。

ただし、小説が、植民地時代に遡るルワンダのジェノサイドをテーマにしていることは、冒頭のエピソードから明らかである。実在の政治家名を押さえることで、ジェノサイドが、政治家個人の問題にとどまらない、ルワンダの政治の問題として浮き彫りにされる仕掛けだ。

3) 政治的策謀としてのジェノサイド

『イニェンジ』には名門女子校の生徒たちの日常が描かれている。日常生活のすみずみに政治が入り込み、政治家があおる民族対立の憎しみの言説に生徒たちは浸され、互いに対立し、あるいは助け合って、光明を探っていた。その有様は、『ナイルの聖母マリア』でも描かれている。

さらに、『ナイルの聖母マリア』では、一見世間から隔絶しているかに見える寄宿舎生活が、1970年代のルワンダ支配階級社会の縮図として設定されている。グロリオサの父は大統領の側近、モデスタの父は再フツ化した男、ゴレッティの父は北部の軍人、ゴデリブの父は大統領の取り巻きの銀行家、フリーダの父は外交官秘書、イマキュレの父は実業家である。娘たちは父と同じ価値観を有し、父から政財界の情報を得て、学校という閉ざされた空間の中で小さな政治世界を構成する。親たちの人間関係が娘たちの世界でも再現され、同盟と対立の錯綜する複雑な人間関係が織りなされていく。フツ至上主義、大統領取り巻きによる国富の占有、北部軍人の不満、近隣国との緊張などがマイクロコスモスの中に持ち込まれる。最終的には、フツ至上主義者が民兵らを校内に導き入れ、ツチの虐殺を実行し、それがクーデタへと反転していくのだ。

ジェノサイドと性の問題はすべての先行作品で語られ、ツチの女性に対する略奪やレイプが告発されてきた。『ナイルの聖母マリア』ではヴェロニカがその犠牲となるが、彼女はまた、白人のツチへの妄想の犠牲者としても描かれている。

4) 「ハム仮説」

ハム仮説に対する批判はムカソングのすべての作品で行われるが、『ナイルの聖母マリア』ではその批判が最も厳しく展開される。白人画家の妄想がルワンダの伝統を傷つけ、ツチの女子生徒の死を招く。白人は何でも無遠慮に知りたがり、あげくに曲解し、妄想の果てに、自分の国では許されないことをルワンダ人女性に対して行ってきた、としてその罪が厳しく問われるのだ。

5) ベルギーと教会

ルワンダでベルギーとカトリック教会が果たしてきた役割についても、ムカソングアのすべての作品で批判的に描かれている。ベルギー植民地当局と教会は手を携え、ハム仮説を根拠としてツチ優遇政策をとるも、一転、「社会革命」支援に回って、フツを権力の座につけた、と批判される。また、キリスト教や文明開化の名の下に、伝統宗教や習慣を貶めたと断罪される。『ナイルの聖母マリア』では、ルワンダの政治家の実名が避けられているのに対して、ベルギーについては国王などの実名が掲げられていることが注目される。また、教会関係者としてフツ至上主義のルワンダ人神父、ハム仮説を奉じる白人神父らが登場し、ジェノサイドに直接間接に手を染める。

『イニェンジ』では、1994年の虐殺時に数多くのマリア像が、ツチの面立ちだという理由で壊されたという事実が語られている。『ナイルの聖母マリア』では、このエピソードが1970年代に置き直されたといえよう。

小説のタイトルである *Notre-Dame du Nil* は、小説の舞台となる学校名である。作家の母校ノートル＝ダム・デ・シトーがモデルであることは明らかである。一方、このタイトルは、「ナイルの聖母マリア」も意味する。このことは、白人がナイルの源流を「発見」し、ハム仮説が補強されたこと、人種主義に立脚してキリスト教を布教し、黒いツチ的マリア像を流布し、そのことが、フツの不幸の源流となったことを象徴的に表しているのだ。

6) 夢のテーマ

「死者と生者をつなぐ夢」はムカソングア作品の重要なモチーフである。伝記的作品においては、作家の見た夢が書きとどめられている。『イニェンジ』では、語り手は悪夢に苦しみ、『裸足の女』では、幼友達の声が夢の中でこだまする。

フィクションの世界で、夢はより大きな役割を与えられる。『リギフ』の「雌牛の栄光」で、語り手は夢で王に呼びかけられるが、応えない。そして、『ナイルの聖母マリア』では、夢でヴィルジニアが女王のウムジム（霊）の訪問を受ける。この夢の女王は、『イニェンジ』で語り手が訪れていたという、王の未亡人ギカンダを想起させる。

ヴィルジニアは夢解き人の指示に従って女王の霊を鎮め、その褒美として、夢で女王の霊から牛を与えられる。その夢に娘の心は安らぎ、その牛の名をもって、友に命を委ねる決心をする。夢と現実が相互に作用し、夢を介して、死者の霊が

生者に行動の指針を与えるのだ。一体に、ムカソング作品では、白人の到来によって伝統文化は断絶を強いられたと提示される。『ナイルの聖母マリア』では、伝統的な夢見の機能が小説世界において復権しているといえよう。

7) 民族、人種を越えて

ジェノサイドはいかにして克服しうるのか。

『ナイルの聖母マリア』では、ヴィルジニアの母親が、娘が学歴を得て「ツチでもフツでもない、かつてベルギーが『開化民』とよんだ、もうひとつの「エスニー」になること」⁽²⁰⁾を望んでいる。ヴィルジニアも免状取得が目前だからと学校から逃げようとしないう。一方、学業を放棄して白人のもとに走ったヴェロニカが、非業の死を遂げる。学ぶことに作家の希望が託されていると読めるだろう。

さらに、小説では女性に関してあらたな言説が加えられる。『リギフ』では「女であることの不幸」が取り上げられたが、『ナイルの聖母マリア』では、女であることが、男であることと較べて一定の顕揚をみる。クーデタ騒ぎの後、イマキュレは、「男たちが怖くなった。私のボーイフレンドでさえツチたちを職場からたたき出したと自慢している。もう彼とは会いたくない」と言う⁽²¹⁾。そして、アメリカ人動物学者ダイアン・フォッシーを思わせる、件の白人女性ゴリラ研究者の助手として雇われるつもりだと語る。このイマキュレの抱負に、白人女性とルワンダ人女性の協同の可能性を読むこともできるだろう。

おわりに

1994年のジェノサイドから十年たって、ようやく「死者たちの国」へ戻ったムカソングは、愛する人々の無念の死を思って、あらためて激しい憤りと哀しみにとらえられる。一方で、2004年のニャマタで1994年のジェノサイドと向き合ったことで、作家は、その惨劇を証言することが自身の義務であると感じ、死者たちの思い出を書き記そうと決意するにいたる。肉親の最期を証言することは、作家にとってあまりにも辛い経験ではあったが、結果として自伝的作品『イニエンジ』は完成され、その経験が、さらに『裸足の女』を用意することになる。

『裸足の女』は作家の母の生涯を記した回想録である。言葉で美しいかたびらを織って母を葬送しようとする、娘の切ない思いに満ちている。ほのか

なユーモアを交えながら、最愛の人が逆境のなかで戦い抜いた女傑として描かれ、アフリカの母の象徴にまで昇華される。作品の最後で1994年の死者が夢に現れ、自分たち全部を包む大きなかたびらがあるのかと問うが、つづく『リギフ』がその答えを準備する。

『リギフ』で作家は、先行する伝記的作品を踏襲しつつ、フィクションの世界に入っていく。祖父母の世代のフツの生活などが調査され、証言にとどまらない、歴史への考察が深められていく。肉親だけでなく、1994年の犠牲者たちすべてを悼む、大きな言葉のかたびらを織ろうとするのだ。「服喪」の幕切れで、ジェノサイド記念館の番人が、主人公に「死者たちはおまえとともにあって、おまえに生きる力を与えるのだ」と告げる。読者は、次なる『ナイルの聖母マリア』で、作家が死者たちから生きる力を得て、ジェノサイドの根源に迫る姿を見るのだ。

小説『ナイルの聖母マリア』には、前三作とは異なり、1994年の虐殺の話も作家の肉親の姿もない。死者たちの思い出をつづったことで、作家は葬送を果たしえたのだろうか。死者たちが生者とともにあると実感できたのだろうか。ここでは「死者たちの国」の表現は消え、ルワンダは「死の国」となる。小説は、死者たちの回想ではないという意味において、生者たちを描いている。作家自身もこの作品とともに生者の世界に復帰したことが、読者には感じられる。苦いユーモアと風刺を交えて、ジェノサイドに傾く人間の狂気をあぶり出し、その起源が奈辺にあるのかを尋ねているのだ。

こうして私たちは、作家が、書くことを通じて証言し、回想し、真実を探求する姿を見る。作家が自ら再生し、自ら救済される道を拓いていく道筋に立ち会うのだ。『ナイルの聖母マリア』の最後で、「命の太陽が再びルワンダに輝いたら、戻って来る」とヴィルジニアが告げ、「その時はゴリラの森で会おう」とイマキュレが答える⁽²²⁾。死の国にいつ太陽は戻るのだろうか。答えはすでに用意されていると思える。

註

- (1) Scholastique Mukasonga, *Inyenzi ou les Cafards*, Gallimard, Paris, 2006.
- (2) Scholastique Mukasonga, *La Femme aux Pieds nus*, Gallimard, Paris, 2008.
- (3) Scholastique Mukasonga, *L' Iguifou*, Gallimard, Paris, 2010.
- (4) Scholastique Mukasonga, *Notre-Dame du Nil*, Gallimard, Paris, 2012.
- (5) ルワンダのジェノサイドについては、武内進一、『現代アフリカの紛争と国家—ポストコロニアル家産制国家とルワンダ・ジェノサイド—』、明石書店、2009。（サントリー学芸賞、国際開発研究大来賞受賞）という瞠目すべき研究書がある。本稿で用いる歴史・政治用語の多くはこの研究書に依っている。
- (6) 『イニエンジ』の語り手は自身の生年を告げない。また、作家は失った家族の数を27人と公表しているが、『イニエンジ』では37人となっている。
- (7) Scholastique Mukasonga, *Inyenzi ou les Cafards*, Gallimard, Paris, 2006, p.39.
- (8) *Ibid.*, p.77.
- (9) *Ibid.*, p.120.
- (10) *Ibid.*, p.129.
- (11) *Ibid.*, p.158.
- (12) *Ibid.*, p.47.
- (13) *Ibid.*, p.122.
- (14) Scholastique Mukasonga, *La Femme aux Pieds nus*, Gallimard, Paris, 2008. p.13.
- (15) Scholastique Mukasonga, *La Femme aux Pieds nus*, Gallimard, Paris, 2008. p.142.
- (16) Scholastique Mukasonga, *L' Iguifou*, Gallimard, Paris, 2010. p.120.
- (17) Scholastique Mukasonga, *Notre-Dame du Nil*, Gallimard, Paris, 2012, p.182.
- (18) Scholastique Mukasonga, *Notre-Dame du Nil*, Gallimard, Paris, 2012, p.199.
- (19) Scholastique Mukasonga, *Notre-Dame du Nil*, Gallimard, Paris, 2012, p.217
- (20) Scholastique Mukasonga, *Notre-Dame du Nil*, Gallimard, Paris, 2012, p.125.
- (21) Scholastique Mukasonga, *Notre-Dame du Nil*, Gallimard, Paris, 2012, p.219.
- (22) Scholastique Mukasonga, *Notre-Dame du Nil*, Gallimard, Paris, 2012, p.223.